特集号「東京 — 過去・現在・未来 — (Part III)」

終わりにあたって

菊 地 俊 夫¹⁾ 稲 崎 富 士²⁾ 熊 木 洋 太³⁾
 呉 羽 正 昭⁴⁾ 佐 野 修⁵⁾ 須 貝 俊 彦⁶⁾
 丸 井 敦 尚⁷⁾

Afterword of the Special Issue on “Tokyo: Past, Present, and Future (Part III)”

Toshio KIKUCHI¹⁾, Tomio INAZAKI²⁾, Yohta KUMAKI³⁾,
 Masaaki KUREHA⁴⁾, Osam SANO⁵⁾, Toshihiko SUGAI⁶⁾
 and Atsunao MARUI⁷⁾

I. 本特集の意義と目的

特集号「東京—過去・現在・未来—」は地球科学や地学・地理学の新しい方向を模索することを考慮して編集された。「東京」は第2次世界大戦後、巨大都市や世界都市としての歩みを確かなものとし、人やモノ、資本（金）や情報などが一極集中する場所となり、さながら世界で類をみない超巨大都市の姿や性格を呈するようになった。しかし、産業構造の変革や技術革新、あるいは情報革命や価値観の多様化、さらにはエネルギー革命やグローバル化などが進展した現在において、超巨大都市となった「東京」には、さまざまな軋みや課題が顕在化してきている。そのような状況のなかで、「東京」は21世紀の新しい文明を享受

するとともに、将来に向けて選択しなければならない大きな岐路に立っているともいえる。このような課題は世界の大都市の多くで共通して生起している。大都市問題が生起した理由のなかで最も重要なものとして、21世紀がボーダーレスの時代になっていることがあげられる。現代は、人、モノ、資本（金）、情報がかつてない規模で、しかも瞬時に、低コストで移動する時代になっている。したがって、ボーダーレス化による大都市の性格の変化や機能の変容を把握したうえで、本特集号は「東京」に焦点を絞りながら、グローバルな視点で「東京」の過去と現在、および将来の諸相を議論することにした。巨大都市における新たな文明とは何かを考えるために、メガロポリス「東京」の歴史や地域的性格を、地球科学や地学、

¹⁾ 首都大学東京都市環境科学研究科

²⁾ 土木研究所

³⁾ 専修大学文学部

⁴⁾ 筑波大学生命環境系

⁵⁾ 東京大学名誉教授

⁶⁾ 東京大学大学院新領域創成科学研究科

⁷⁾ 産業技術総合研究所

¹⁾ Graduate School of Urban Environment Sciences, Tokyo Metropolitan University, Hachioji, 192-0397, Japan

²⁾ Public Works Research Institute, Tsukuba, 305-8516, Japan

³⁾ Department of Geography, School of Letters, Senshu University, Kawasaki, 214-8580, Japan

⁴⁾ Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba, Tsukuba, 305-8572, Japan

⁵⁾ Professor Emeritus, The University of Tokyo, Tokyo, 113-0032, Japan

⁶⁾ Graduate School of Frontier Sciences, The University of Tokyo, Kashiwa, 277-8563, Japan

⁷⁾ Geological Survey of Japan, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, Tsukuba, 305-8567, Japan

自然地理学、人文地理学、考古学、歴史学、政治史、都市計画などから検討し、それらを踏まえたうえで、現代および将来の課題を整理した。

地学雑誌の特集号「東京」編集委員会では、地球科学的、および地学・地理学的な視点だけでなく、環境科学的な視点や都市計画的な視点、あるいは研究者の視点だけでなく行政担当者の視点もとり入れるなど多角的な視点で、「江戸」以前の土地から「江戸」へ、そして「東京」にいたるまでの過去から現在までの基盤と、そこで展開する多様な人間活動の状況をさまざまなトピックを通じて把握することを特集号の第1の主眼とし、前者はPart Iで、後者はPart IIで議論した。さらに、「東京」の過去から現在まで状況を把握し、それらの総合的な議論を踏まえて課題を整理し、将来に向けての提言を議論することや大都市のインフラ整備のあり方を再検討することが第2の主眼となった。それらがPart IIIにおいてまとめられた。

以上に述べた2つの主眼に基づいて、特集号のPart IからPart IIIまでの構成は表1のようになる。

II. 特集号「東京—過去・現在・未来— (Part III)」の概要

徳仁親王(2014)は、中世以降のイギリスにおける河川と閘門の歴史を概観し、17世紀から18世紀にかけてのロンドンの拡大と地方の農業の発展が交通路としての河川の重要性を高めたこと、さらに閘門の敷設、河川の改修、運河の掘削など、イギリスの工業の発展を支えた水運の歴史を紹介した。さらに、19世紀の鉄道時代の到来により衰退していった運河では、近年レジャーやレクリエーションを目的とする舟運の復活の兆しがみられるようになり、産業革命を育んだ偉大な遺産が新たな使い道をもつようになっていることも紹介した。そのようなイギリスのロンドン大都市圏の状況を踏まえながら、江戸の水運の発達史について、利根川の東遷、見沼溜井の造成、見沼代用水の掘削、見沼通船堀の建設などの様相を事例として現況とともに説明した。ロンドンも江戸

もそうであるように、水環境の整備が都市の発展には不可欠なものとなっていた。そして、江戸周辺の水路網の変遷と整備の一例として、江戸に導水された玉川上水が果たしてきた役割の大きさを指摘した。最終的には、人と水との多様なつながりについて、開発途上国での事例を紹介しながら説明しており、国際社会における多様な水問題とその解決方法の重要性にも言及した。

上述した研究と関連して、稲崎ほか(2014)は、利根川東遷を嚆矢とする関東平野における河川改修について、過去400年にわたる歴史を概括しながら、その間のさまざまな改修事業を社会基盤や生産基盤整備事業として捉えなおした。関東平野域内における河川改修事業の成果として、主要河川沿いに河岸を結節点とする内陸の水運ネットワークが構築され、地場産業の誕生と発展が促されたことを指摘するとともに、物流が契機となって形成された都市形態が江戸湾を囲んで展開している様相を紹介した。また、関東平野の河川系の流路を規制する要因となった地形学・地質学的条件を明らかにし、長期的な河川改修事業の遂行には、その地域の「場」や都市基盤の理解、すなわちテクトニックな構造運動とその結果としての地形変動、地質構造の理解が不可欠であることを指摘した。

古村(2014)は、超高層ビルや大型石油タンクなどの長大構造物を多数有する東京において、それらが抱える長周期地震動のリスクと対策を考えるため、関東平野下の堆積層構造と長周期地震動の発生事例と生成メカニズムについて、近年の大地震に対する高密度地震観測データをもとに解説した。とくに、非対称な土地基盤と堆積層構造による長周期地震動の増幅の強弱の方位特性や、長周期地震動が都心に集合する現象など、関東平野特異の長周期地震動の特徴を紹介し、その励起が小さい理由の諸要因を示唆した。さらに、長周期地震動に共振を起こした構造物が、大きく長く揺れ続ける振動特性についても解説した。また、南海トラフ沿いの巨大地震の際に、関東地方で想定される長周期地震動をコンピュータシミュレーションに基づき、3次元運動方程式の差分法

表 1 特集号「東京—過去・現在・未来— (Part I-III)」構成。

Table 1 Contents of the Special Issue on "Tokyo: Past, Present, and Future (Part I-III)."

タイトル

Part I

- 1 Introduction to the Special Issue on "Tokyo: Past, Present, and Future (Part I)"
- 2 特集号「東京—過去・現在・未来— (Part I)」序説
- 3 過去 40 万年間の関東平野の地形発達史—地殻変動と氷河性海水準変動の関わりを中心に—
- 4 東京低地と中川低地における最終氷期最盛期以降の古地理
- 5 東京低地と沖積層—軟弱地盤の形成と縄文海進—
- 6 東京とその周辺の地形改変
- 7 東京における江戸時代以降の気候変動
- 8 過去百年間における都市化にともなう東京の生物相の変化
- 9 東京の都市用水利用の変遷—水源としての表流水と地下水に着目して—
- 10 東京における眺望景観の過去・現在・未来
- 11 東京の自然災害脆弱性を検証する
- 12 東京とその周辺における火山災害の歴史と将来

Part II

- 1 Introduction to the Special Issue on "Tokyo: Past, Present, and Future (Part II)"
- 2 「東京—過去・現在・未来— (Part II)」序説
- 3 首都圏の深層地下水
- 4 東京の水環境
- 5 稠密観測データに基づく晴天弱風の冬季夜間における東京都区部を中心とした気温分布について
- 6 多摩地区を中心とした東京における緑地環境の変化と管理
- 7 東京の土木における最新の技術動向—羽田空港 D 滑走路拡張工事での海域地盤調査、環境影響評価、地下水対策—
- 8 東京を中心とした都市構造と交通計画との関係
- 9 バブル経済期以降の東京 23 区における人口変化の空間的パターン
- 10 東京都心部に居住する子どもをもつ就業主婦の生活時間—インターネットの利用が及ぼす効果の分析を中心にして—
- 11 東京における産業構造の変化
- 12 東京の電気事業と電源開発
- 13 東京の地位—世界都市との比較において—

Part III

- 1 江戸と水
- 2 400 年を越えて続いた日本史上最大最長の土木事業—関東平野における河川改修事業を規制したテクニク的な制約—
- 3 関東平野の深部基盤構造と長周期地震動リスク
- 4 寺社分布と機能からみた江戸の宗教空間
- 5 東京における水の熱エネルギー利用
- 6 東京における持続可能社会の実現とエネルギー問題
- 7 東京の生物多様性とその展望
- 8 東京の環境政策とエコシティ化
- 9 東京の一極集中問題と首都機能の分散
- 10 東京都市圏の交通計画—その過去・現在・近未来—
- 11 東京におけるごみ行政と今後の展望
- 12 東京における食料問題とその解法
- 13 東京におけるイベントの力とその将来性
- 14 首都東京の未来像
- 15 座談会：特集号「東京—過去・現在・未来—」のまとめ
- 16 Overview of the Special Issue on "Tokyo: Past, Present, and Future (Part III)"
- 17 特集号「東京—過去・現在・未来— (Part III)」終わりにあたって

(FDM) 計算から評価し、将来の大地震への備えと防災に向けた課題を示した。

一方、江戸東京の土地に基づいて文化的基盤がどのように形成されたかを明らかにするため、松井（2014）は宗教都市としての江戸の都市計画について、四神相応や方位学といった地理思想の与えた影響について概括した。また、寺院法度により本末制度が組織化されるとともに、寺請制度により庶民を檀家として強制的に寺院と結びつけるという宗教行政により、寺院が幕府の末端機構として社会秩序の維持システムに包含されてきた経緯を詳述し、江戸幕府の宗教統制システムに基づく寺院・寺町の分布と変遷について解説した。そのうえで空間的な理念と都市拡大という現実のなかで配置がなされてきた寺院が、その立地特性を活かした寺社境内の貸地・貸家といった土地運用が行われ、さらに興行地化という形で余暇空間の場として機能するようになった状況を検討した。つまり、江戸東京の宗教空間には名所や都市のシンボルとしての機能が付加されることにより、新たな寺社景観が将来的に構築されことも予想できる。

吉岡（2014）は、水の熱的性質を「水の熱エネルギー」として利用した環境改善策や省エネルギー技術として、東京における夏期のヒートアイランド現象の緩和対策（大気熱汚染改善策）としての「打ち水・散水」をとりあげ、その実践に関する市民活動や既存研究について報告するとともに、散水効果の定量化を行った。さらに、地下に存在する水の熱利用として、現在日本でも導入件数を急速に伸ばしつつある「地中熱利用技術」をとりあげ、その原理と地下水がシステムに与える影響について、東京都内のオフィスビルへの導入例などを紹介しながら説明した。これらの事例紹介を通じて、水を「熱エネルギー」の視点から捉えることによる新たなエネルギー利用の可能性を検討し、太陽光や風力などの発電技術など「どのように電力を生み出すか」に視点を置くだけでなく、今あるエネルギーを効率的に使用するための視点の必要性を強調した。

また持続可能社会の実現に向け、物的要素や環

境要素の面からみて重要なエネルギー問題に着目しながら、東京という都市の特質と今後のあり方を議論した戒能（2014）は、東京都への人口集中と第三次産業を中心とした経済活動の集積を前提とした場合、東京都のエネルギー消費が増加を続けるという見通しを述べた。また、東京都のエネルギー消費の効率性などの比較の結果から、東京都での再生可能エネルギーの供給量では域内での「恒久的持続可能性」が実現困難であるばかりか「過渡的持続可能性」条件すら満たせない状態が続く可能性を指摘した。東京都における今後のエネルギー分野での持続可能性戦略は、域内で供給可能な再生可能エネルギーの合理的な利用促進と同時に、可搬性や貯蔵性に優れた再生可能エネルギーの開発を促進し、これを東京都下に直接に、あるいは間接に供給する「開発輸入」を支援・促進していくという、2つの方向性で進めるべきであるとした。

東京における生態環境に関して、沼田（2014）は、まず生物多様性の損失要因に関する4つの危機に触れながら、生物多様性の現状についての国内外の動向と取り組みを紹介し、東京都の生物多様性とその危機についての議論を展開した。さらに東京都の本土部（区部および多摩地域）、伊豆諸島、小笠原諸島の自然環境と植物と哺乳類からみた生物相について、地域ごとの特徴と現状がまとめられ、東京が都市生態系だけでなく、里地里山に代表される二次的な自然環境の、および伊豆諸島や小笠原諸島のような世界的にも貴重な自然環境と生物多様性の現状が詳しく述べられた。かくして、東京における多くの自然環境は人間の関わりをもちながら存在しており、利用と保全のバランスをとるための適切な管理が必要になっている。そのためには、生物多様性の保全と都市の社会・経済活動を両立させるための基本理念を、具体的な都市計画のなかで位置づけていくことが求められてくると結論づけている。

また、土居（2014）は、環境を人間の生存に必要な外部条件であると考え、都市を両者の相互関係の「場」として捉えた。そして都市において、人間の生存に影響を与える可能性のある事象およ

びその総体を環境問題として扱うこととし、環境問題に適切に対応できるような環境政策などが実施される状況にある都市をエコシティとして位置づけ、東京のエコシティ化について議論をした。このような議論の前提となる日本の環境政策に関する方向性を整理しながら、東京においてエコシティが形成される可能性については、都市計画などの制度的裏づけが必要であることを指摘した。加えて、環境への意識喚起をもたらす活動が不可欠であるとし、その具体的な仕組みの例を、エネルギー、リサイクル、自然環境の各分野から紹介し、それらのエコシティへの今後の方策を展望として議論した。

東京の都市としての性格を検討した戸所（2014）は、第2次世界大戦直後の大都市集中と中央集権体制の構築の時代を経たのち、国土の均衡ある発展を図った1980年代までの日本の国土政策を振り返りながら、20世紀末における首都機能移転の論議の展開、移転の意義と効果、首都移転の候補地について総括した。さらに21世紀初頭の知識情報化社会における東京の一極集中の実態と問題点および評価、そして首都のあり方について議論した。そのうえで、東日本大震災を契機に再び高まった首都機能の移転への関心について触れている。そこでは、巨大地震などの大震災リスクに際し、東京と同時被災しない連携可能な地域において、必要最低限のバックアップ機能が必要であることを指摘している。また日本の安全保障の視点から、東京の一極集中の是正と分権型の国土構造を再構築するためには既存の社会資本を活かす必要があると結論づけ、移転・分散後の東京の未来像について展望している。

清水（2014）は、東京都市圏パーソントリップ調査の結果に基づき東京都市圏の交通需要を整理したうえで、都市鉄道、バス・タクシー交通、道路・街路、空港、港湾のそれぞれの交通システムの特徴を、それらの計画の歴史的経緯を網羅的に整理した。さらに東京都市圏の今後の社会経済情勢の変化および技術開発の動向からみた基本的な方向性を踏まえ、東京都市圏の交通システム整備の維持と改良、および活用に関わる将来的な課

題として、鉄道駅を中心とした公共交通の利用環境の改善、交通システムにおける外国人に対する接遇の改善、広域交通ネットワークを十分に使いこなす運用マネジメントシステムの開発、大規模災害に対するレジリエントな交通システムをとりあげ、それらの対応策や可能性を論じながら、今後20年の東京都市圏の交通計画のあり方や方向性について展望した。

高度経済成長以降の東京のごみ行政について検討した栗島（2014）は、東京が直面したゴミの問題と対処の過程を都区部と多摩地域とに分けて検討した。都区部においては、1970年代のごみ戦争を背景とする自区内処理の原則に則ったごみ処理施設の整備の経過として、広域処理体制における焼却施設の整備・稼働状況や、収集システムにおける分別収集とリサイクルの状況などに触れ、2000年4月の特別区への清掃事業の移管前および移管後の動きを概観した。多摩地域においては、1960年代の都市化を背景に確立されたごみ処理体制が、1990年代の最終処分場をめぐる問題を契機に転換を迫られた結果、有料化やダストボックスの廃止などにより、ごみ排出量と処理ごみ量の削減に成功した経緯を紹介した。結論として、高度な処理や新しい収集システムの導入にともなう財政的な問題、温室効果ガスの増加、NIMBYなどの課題を指摘しながら、東京のごみ問題の今後を展望している。

東京における食料問題とその解法を議論した菊地・飯塚（2014）は、まず東京の食料生産と需給の動向について、農地面積と水稻の生産性、および食料自給率の推移を検討し、需要と供給のアンバランスを食料生産基盤の脆弱化として位置づけた。さらに東京都における食料供給の空間的パターンを野菜の市場への供給状況の時間的、空間的变化から検討した。その結果、東京の食料供給基盤が多様化し、グローバル化してきたことを明らかにしている。このような食料供給のグローバル化にともなう問題点として、国内における食料生産基盤の脆弱化があげられている。その対応策については、食料生産地の付加価値化が農業地域の将来的なあり方の1つとして注目されている。

具体的には、食料供給のグローバル化の対応策として食料の安全・安心性の問題が議論された。これらの検討や議論を踏まえ、東京における食料問題の解法として、地産地消や産直などのフードシステムの再編が糸口になることを示唆している。

東京における都市計画の流れと展望は東（2014）によって議論されている。最初に、東（2014）は明治以降、東京の都市計画に大きな影響を与えてきたロンドン（ドックランズ開発と2012年オリンピック・パラリンピック）とパリ（オスマンの都市改造と万国博覧会）をとりあげ、両都市が大規模イベントと関係しあいながら、都市計画を進めてきた経過を紹介した。そして1964年夏季オリンピックの開催と戦後東京の都市計画との関係を、道路、公園、建築などの基盤整備を中心に述べ、当時、顕在化しつつあった都市問題の解決にオリンピックが大きく貢献したと同時に負の面も残したことを指摘した。さらに20世紀末から21世紀初期に構想された2つの大規模イベント（世界都市博覧会と2016年夏季オリンピック・パラリンピック誘致）が構想段階で挫折した理由を分析し、2020年夏季オリンピック・パラリンピックへの留意点を述べながら、今後の大規模イベントの誘致の将来性とそれに関連した東京の都市計画の可能性を展望している。

青山（2014）は、都心とその周辺のオフィスビルが工業化時代から情報化時代への変化に対応した結果、情報の受発信および知的活動の拠点へと変容したことを指摘し、これを成熟社会における都心機能の進化と位置づけた。さらに特別区制度による一体性の確保と同時に、そのあいまいで柔軟な制度が東京の都市運営をユニークで現実的なものにしていくとした。また、地域コミュニティが果たす機能の重要性を指摘しながら、地域コミュニティのガバナンスの円滑な実施が東京の強みとなっていくと展望している。そして鉄道網や環状道路、羽田空港の新滑走路建設などに見る都市のインフラストラクチャーの整備を総括した。そのことを前提にしながら、2020年のオリンピック開催によって期待される都市の進化が人類社会の進化とつながることが重要であると指

摘した。東京における新しい都市像や生活像が成熟社会における巨大都市の特徴として確立し、さらにそれを世界に発信する方策の検討が21世紀の東京の課題であると結論づけている。

最後に、菊地ほか（2014）は東京の過去・現在・未来をまとめている。東京が立地する土地基盤の特異性が地球科学や地質学、地形学から明らかにされ、東京が変動帯に立地する巨大都市として位置づけられた。このような土地条件を克服する大きなイベントが土地基盤の整備や農地開発、および水運システムの構築であった。そのような自然への人的な働きかけと、地理的な位置（広大な平野の中心地、さまざまなモビリティの中心地など）の活用により、東京には多くの人、モノ、資本（金）、情報が集積し、巨大都市が建設された。巨大都市となった東京の課題は、変動帯の土地基盤に対する自然災害に強い都市づくりであり、過去から現在までの防災に関する英知の蓄積を適切に活用することであり、そのことを踏まえて新たな防災や安全安心の都市づくりのアイディアを発信することである。他方、東京には比較的多くの自然環境が残されており、それらを保全し適正利用する都市づくりも将来的な課題の1つである。そのためには、自然と共生してきた江戸の生活文化を見直し、21世紀型の自然と共生した都市づくりが必要となる。菊地ほか（2014）の結論の1つとして述べられた自然との共生は、東京から世界に向けて発信できる都市の文化でありライフスタイルでもある。

III. あとがき

東京の過去、現在、未来をとりあげた特集号がPart IIIで終わることになる。まだまだ議論しなければならない現象や事項があるし、それらを切り口に東京の基本的な性格や将来的な課題を検討する必要もある。また、「東京」に関する多角的な議論が十分に行えたとはいえないため、深めるための議論を今後も続ける必要がある。しかし、時間や誌面に限りがあるし、特集号の編集委員会の能力にも限界がある。この企画が考えられた当初、多くの編集委員は50代半ばの脂の乗り切っ

た研究者であったが、現在では60を越えてしまっている。私たちが考えた「東京」の企画は、巨大都市や世界都市に発達した東京の多様な性格を多様な分野から学際的に明らかにし、その成果から東京の将来像を明らかにすることであった。過去の東京ではプレート構造や地質年代などの大地の歴史から自然環境や土地基盤を明らかにし、そのような環境を人間がどのように適応し利用してきたのかを議論してきた。そこでは、自然環境を完全に改変しないで土地基盤を整備する姿勢や、自然環境と共生して持続していく人間活動の姿勢がみられた。現在の東京では人、モノ、資本（金）、情報が集中する姿が描かれるとともに、それらの集中を支えた土地基盤や水環境、あるいはインフラストラクチャーや社会制度の整備が描かれ、東京の国内外における優位性が明らかにされた。

国内外における東京の優位性は誰もが認めるところであるが、決して将来に向けての課題がないわけではない。そのような将来に向けての課題は未来の東京で議論された。人、モノ、資本（金）、情報が集中する東京の発展は何を犠牲にして成り立っているのかという問題が過去と現在の東京の議論を踏まえて明らかにされた。結果的には、東京の都市としての位置づけは、経済活動の利潤を最大化する生産主義の考え方から、非経済的な利潤（エコロジーや生きがい、癒しなど）を優先する考え方に変化している。つまり、東京を経済や産業の中心として考えることも重要であるが、生活や居住の中心として考えることも重要になっている。そのような考え方の変換にこそ東京の将来的な課題が潜んでいる。安全安心な都市づくりや少子高齢化社会に適応した都市づくり、あるいは自然環境などと共生した都市づくりなどが東京の将来的な課題となり、それらの都市づくりは東京から世界に向けて発信される文明であり生活文化でもある。東京はいろいろな意味で世界に類をみない都市であり、世界に誇ることのできる都市である。したがって、東京の将来的な課題を克服する姿は世界の他の大都市の手本にもなる。

特集号「東京」は、前編集委員の丸山茂徳氏の

問題提起がきっかけで企画され、Part IIIの発行まで約5年の歳月が費やされた。その間、地学雑誌の編集委員長は3回交代したが、退任された歴代の編集委員長はいずれも特集号「東京」を温かく見守り応援してくださった。また、特集号「東京」は学際的な企画であるため、東京地学協会の会員だけで執筆することができず、非会員の執筆者の皆様にも協力していただいた。また、学術雑誌の企画であるため、すべての論文において査読が行われた。その査読者は会員だけでは困難であり、多くの非会員の研究者の協力を得た。以上、記して感謝する。

最後になってしまったが、長年にわたり江戸の水運の研究に取り組まれている皇太子徳仁親王殿下の原稿を本特集号に賜ったことは、編集委員会にとってこの上なく光栄なことであり、この場を借りて一同より深く感謝申し上げる。

文 献

- 青山 侑 (2014): 首都東京の未来像. 地学雑誌, **123**, 600-613. [Aoyama, Y. (2014): Image of metropolitan Tokyo in the future. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 600-613. (in Japanese with English abstract)]
- 東 秀紀 (2014): 東京におけるイベントの力とその将来性. 地学雑誌, **123**, 587-599. [Azuma, H. (2014): The implications and possibilities of big events in Tokyo. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 587-599. (in Japanese with English abstract)]
- 土居利光 (2014): 東京の環境政策とエコシティ化. 地学雑誌, **123**, 516-527. [Doi, T. (2014): Environmental policies and measures for an Eco-City in Tokyo. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 516-527. (in Japanese with English abstract)]
- 古村孝志 (2014): 関東平野の深部基盤構造と長周期地震動リスク. 地学雑誌, **123**, 434-450. [Furumura, T. (2014): Risk of long-period ground motion due to the deep basement structure of the Kanto basin. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 434-450. (in Japanese with English abstract)]
- 稲崎富士・太田陽子・丸山茂徳 (2014): 400年を越えて続いた日本史上最大最長の土木事業—関東平野における河川改修事業を規制したテクニクな制約—. 地学雑誌, **123**, 401-433. [Inazaki, T., Ota, Y., and Maruyama, S. (2014): The largest and longest project in Japan—Spanning over 400 years: River improvement works in the Kanto plain and constraints of tectonic setting. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 401-433. (in Japanese with English abstract)]

- 戒能一成 (2014): 東京における持続可能社会の実現とエネルギー問題. 地学雑誌, **123**, 486-496. [Kainou, K. (2014): Achieving sustainable long-term energy demand and supply in the Tokyo metropolis. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 486-496. (in Japanese with English abstract)]
- 菊地俊夫・飯塚 遼 (2014): 東京における食料問題とその解法. 地学雑誌, **123**, 575-586. [Kikuchi, T. and Iizuka, R. (2014): Examination of solutions to food problems in Tokyo. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 575-586. (in Japanese with English abstract)]
- 菊地俊夫・稲崎富士・熊木洋太・呉羽正昭・佐野 修・須貝俊彦・丸井敦尚 (2014): 座談会: 特集号「東京—過去・現在・未来—」のまとめ. 地学雑誌, **123**, 614-627. [Kikuchi, T., Inazaki, T., Kumaki, Y., Kureha, M., Sano, O., Sugai, T. and Marui, A. (2014): Discussion of conclusion for the special issue on "Tokyo: Past, present, and future". *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 614-627. (in Japanese with English abstract)]
- 栗島英明 (2014): 東京におけるごみ行政と今後の展望. 地学雑誌, **123**, 556-574. [Kurishima, H. (2014): Analyses and perspectives of municipal solid waste management in Tokyo. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 556-574. (in Japanese with English abstract)]
- 松井圭介 (2014): 寺社分布と機能からみた江戸の宗教空間. 地学雑誌, **123**, 451-471. [Matsui, K. (2014): Discussions on the religious space of Edo City: The landscape and functions of temples and shrines. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 451-471. (in Japanese with English abstract)]
- 徳仁親王 (2014): 江戸と水. 地学雑誌, **123**, 389-400. [Prince Naruhito (2014): Edo and water. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 389-400. (in Japanese)]
- 沼田真也 (2014): 東京の生物多様性とその展望. 地学雑誌, **123**, 497-515. [Numata, S. (2014): Current status and perspectives of biodiversity in Tokyo. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 497-515. (in Japanese with English abstract)]
- 清水哲夫 (2014): 東京都市圏の交通計画—その過去・現在・近未来—. 地学雑誌, **123**, 542-555. [Shimizu, T. (2014): Transport planning in the Tokyo metropolitan region: Its history, current situation and future perspectives. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 542-555. (in Japanese with English abstract)]
- 戸所 隆 (2014): 東京の一極集中問題と首都機能の分散. 地学雑誌, **123**, 528-541. [Todokoro, T. (2014): Decentralizing Tokyo's capital functions. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 528-541. (in Japanese with English abstract)]
- 吉岡真弓 (2014): 東京における水の熱エネルギー利用. 地学雑誌, **123**, 472-485. [Yoshioka, M. (2014): Using of the thermal energy of water in Tokyo. *Journal of Geography (Chigaku Zasshi)*, **123**, 472-485. (in Japanese with English abstract)]